『ガストン・ド・ラトゥール』再考

――ガストンの自己修養過程の考察――

虹林　桜

はじめに

ウォルター・ペイターによる『ガストン・ド・ラトゥール』(1888–1896)（*Gaston de Latour*）は、16 世紀フランスを舞台に聖職者ガストンの人生を描いた未完成の小説である。本作品は、初版の編者であるチャールズ・シャドウェルが述べる通り、感覚と知性の両方を超越する要素を探求するガストンの自己修養の過程を描いている(*Works* 4: 158 “Preface”)。ペイターのフィクションにおける主人公の自己修養の過程については、故郷から出発して故郷に帰還する円環的な語りが知られるが、ガストンの自己修養の過程についても、これまでの研究では、子供時代の生得的感受性を取り戻そうとする円環的な特徴が強調されてきた(Monsman 361, Lee 162)。この議論を踏まえ、本稿はガストンの自己修養が自己の生得的感受性を再獲得する過程をルネサンス的なものとして定義し、その過程が初めの状態へ回帰する円環ではなく、円を描きながらも、より洗練された自己の感受性を目指して段階的に上昇する構造となっている可能性を指摘した。そして、このガストンの自己修養の過程は『ルネサンス』(1873)（*The Renaissance*）における “passion”の美学を考察する上で重要な鍵となりうることを示した。

１．『ガストン・ド・ラトゥール』概要

本作品はペイターの構想した三部作の二作目（一作目は『享楽主義者マリウス』）であり(Letters 65)、前作同様ペイターの代表作『ルネサンス』の主張を反映している。本作品における “passion”は『ルネサンス』の「結語」で言及される “passion” (*Works* 1: 238–39)と呼応し、美への欲求の原動力を示している。この原動力は、本作品においてガストンの心の二つの性質（“A nature instinctively religious”または “simple old-fashioned faith”、そして “sensibilities of another kind”または “the imaginative heat”）を不可分なものとして、幼少期より共存させる (*CW* 47)。

２．ガストンの自己修養①生得的な「共感」の形成

ガストンは幼少期を過ごした相生の領主館で、二つの性質の共存状態を育む。祖先ガブリエル・ド・ラトゥールが生前過ごした部屋で、彼は自身の“instinctively religious”(*CW* 47)な性質を親族の遺した “relics”に表れる人間生活の痕跡に向ける。ガストンはそこに『ルネサンス』における“passion”を彷彿とさせる“grand passions”や “great passion”を感じ取り、“dainty love”と結びつける(*CW* 46–47)。ガストンにとって、 “passion”は過ぎ去った人間生活の痕跡に現れる悲哀や美の源であり、この世の “humanity” (*CW* 47)に対する愛を育むものといえる。また、ガストンは自身が重要な要素として挙げる “great passions”を当時の宗教戦争の “cruelties”と対峙させ、それが発揮される条件が異なる場合、“[s]orrow”と“beauty”が喚起する“universal sympathy”にも反転しうるものであるとする(*CW* 47–48)。こうしてガストンの心の二つの性質は “passion”を基に共存し、“sympathy”を形成する。この“sympathy”は、人間性に対する愛としての “passion”を『ルネサンス』の“desire of beauty” (*Works* 1: 239)に発揮させ、事物の中の人間性を美としてとらえる点で、人間性の美への愛であるといえる。その後、ガストンはシャルトルの教会で聖遺物を扱う際も、故郷の人間生活を反映した事物を連想して “sympathy”の愛を実感し、自身の“relic”を敬う感情を再認識する (*CW* 51)。

３．ガストンの自己修養②後天的な「共感」の獲得

感覚的な美への崇拝が深まる一方、ガストンの聖職者としての義務感は感覚的な美の負の側面を誘惑と捉える。そしてそれは彼がパリで仕える主人、王妃マルグリットの残酷な愛として現れる。ガストンは、“passion”が残酷な愛と共感の愛という対極的な二種類の愛を生じさせることを認識しつつ、 後者に人間性の美を感じる。この二種類の愛は、マルグリットの部屋とガストンが幼少期を過ごした相生の領主館の部屋にある事物の表象によって象徴的に示される。二つの部屋にある “relic”は“passion”を共通項に持つものの、それぞれ感覚のみが支配する残酷な愛と知的な “sympathy”の愛という真逆の愛として結実する。マルグリットの部屋は異教の偶像崇拝の場所に喩えられる(*CW* 148)。視覚の美のみを頼り、知的な美を追求しない肉体の崇拝の“relic”は王妃の高価な所有物とともに物質的に陳列され、残酷な愛の虚栄と不毛さを強調する(*CW* 148)。対照的に、礼拝堂に喩えられたガストンの故郷の相生の領主館の部屋にある“relics”は知的で継続的な “dainty love”を伝え、感覚と知性とをつなごうとするガストンの “sympathy”の基礎となる(*CW* 46–47)。ガストンはマルグリットのもとで“Unkindly or cruel love”を目の当たりにし、一旦肉体崇拝に影響を受けるが、“impassioned love of passion”を感じることで “sympathy”の愛へと向かうことになる (*CW* 146–47)。感覚の美の誘惑は、キルケの島やシャルトルの迷路、そしてラ・ジョコンダにおける循環しているように見える背景のようにガストンを閉じ込めるが、ガストンは “passion”を契機に生来的な感受性を取り戻すことで誘惑を退ける円環的な行路を作り出す(*CW* 146–47)。

４．ガストンの自己修養③直観的「共感」から知的「共感」への移行

ガストンはジョルダーノ・ブルーノの思想によって新たな段階に達する。かつて直観的に捉えていた感覚と知性の結びつきに対して知的な意味を与えることで自己修養を行い、ガストンは円環的な迷路から上の方向へと新たな行路を作り出す。ブルーノは感覚的世界に属するものを“shadow”、知的世界に属するものを“substance”とし、“shadow”と “substance”に区別はないとする “indifference”の思想を提示する(*CW* 120)。ガストンはこの“indifference”について完全には納得しないが、その思想から “passion”を正しい方向へ向けるヒントをつかむ。生来的な感受性の洗練を可能にする “indifference”の思想による自己修養は “raise”という向上を示す言葉で表現される(*CW* 121)。この新たな段階は、プロット上の最終章といえる 13 章の啓示的体験で具体的に示される。ガストンはイタリアのルネサンス芸術に触れることで、それまで “relic”に感じてきた人間性の美を “sympathy”の理想形として見出す。それは“genius”という守護霊のような存在としても表され、 “kindly love”を体現する(*CW* 182)。こうして、ルネサンス芸術という人間性の美を体現した “relic”を介して知的 “sympathy”を獲得することで感覚と知性とを新たにつなぐことに成功したガストンは、自らの生得的な “sympathy”に知的に理由を与え、直観的な“sympathy”の愛から、知的な “sympathy”の愛を持つ人物に洗練されていく。

結論

ペイターのフィクションにおける主人公は、特に幼少期の感覚的体験に則した具体的事物への反応を通して自己修養を行うが(Moran 297)、ガストンの自己修養も同様の過程をたどっているといえる。本作品において感覚的事物としての“relic”はガストンの感覚と知性をつなぎ、人生の瞬間を豊かにする “passion”を引き起こすものとして示される。その点で、ガストンは“relic”から知的感受性を発達させる幼少期の館での過程を、シャルトルの聖遺物、マルグリットの部屋の事物、そしてルネサンス絵画にその都度適用しているといえる。最終的に幼年期の感受性を洗練させるガストンの自己修養の過程は、一見、円環的に見える。しかし、ガストンの旅路は最初の地点にただ戻るものではない。彼は“sympathy”によって、身近な “relic”に宿る人間性の美に理由を与える知性としての感受性を洗練、向上させていく。ガストンの自己修養はいわば自分自身のルネサンスであり、自己の生得的感受性を以前より高められた段階へと向上させ続けるものだといえる。この点で、人生の瞬間を豊かにする美への衝動としての “passion”を自己修養の契機として描く本作品は、未完ながらもペイターの『ルネサンス』の “passion”の美学を考察する上でも重要性が高い作品といえる。

引用文献

Lee, Adam. *Platonism of Walter Pater: Embodied Equity*. Oxford UP, 2020.

Monsman, Gerald. “Narrative Design in Pater’s ‘Gaston de Latour.’” *Victorian Studies*, vol. 23, no. 3, 1980, pp. 347–67.

Moran, Maureen. “Walter Pater’s House Beautiful and the Psychology of Self-Culture.” *English Literature in Transition, 1880-1920*, vol. 50, no. 3, 2007, pp. 291–312.

Pater, Walter. *The Collected Works of Walter Pater: Volume Four: Gaston de Latour*. Edited by Gerald Monsman, Oxford UP, 2019.

---. *Letters of Walter Pater*. Edited by Lawrence Evans, Oxford UP, 1970.

---. *The Works of Walter Pater*. Cambridge UP, 2011, 8 vols.